『歎異抄』第２条（後編）
～念仏に生きる～

■第２条について

（梯 實圓『聖典セミナー 歎異抄』67～68 頁）

『歎異抄』のなかでも、とくにこの第二条は、ただならぬ雰囲気をもったドラマチックな法語です。

まず北関東から京都まで、十余カ国をこえ、数百キロにのぼる危険な旅をつづけて、親鸞聖人をたずねてきた幾人かの念仏者たちの思いつめた鋭いまなざしが感じられます。彼らは、極楽に往生してゆくほんとうの道すじを問いただすという、ただひとつの目的に、いのちをかけている求道者たちでした。それもただ念仏の教えに疑いをもっているだけではなく、親鸞聖人自身についても、はっきりと問いただしておきたい疑惑をいだいていたようです。

そのせいでしょう。彼らの問いを受けて立つ聖人の応答の姿勢には、つねなみとはおもえない、きびしさがみうけられます。それは単に門弟を教えさとす師としての態度ではなく、自分自身の念仏の信心を真剣に、率直に告白し、証言するかのようにみえます。･･･（中略）･･･

この法語の背後には、問いただすものにも、応答される側にも、命がけにならざるを得ない状況があったに違いありません。

■前回のおさらい

親鸞聖人が帰洛し、80 歳を過ぎた頃、関東では「悪人が救われるなら、すすんで悪をおこなおう」とする、造悪無碍の異義が生じており、事態の沈静化を図って長男の善鸞が派遣されるも、さらなる混乱を招いた。念仏の教えに動揺する関東の門弟たちは、聖人へ直接、「往生極楽のみち」を尋ねる為に「十余箇国のさかひ」を超えて上京。『歎異抄』の著者である唯円も、その一人であったと推定される。

■親鸞聖人の回答

しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にもゆゆしき学生たちおほく座せられて候ふなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。

けれども、このわたしが念仏の他に浄土に往生する道を知っているとか、またその教えが説かれたものなどを知っているだろうとかお考えになっているのなら、それは大変な誤りです。そういうことであれば、奈良や比叡山にもすぐれた学僧たちがいくらでもおいでになりますから、その人たちにお会いになって、浄土往生のかなめを詳しくお尋ねになるとよいのです。

南都　＝　奈良
「南都六宗」・・・法相宗・倶舎宗・三論宗・成実宗・華厳宗・律宗
北嶺　＝　比叡山延暦寺（天台宗の総本山）

「念仏以外の道を知りたければ、奈良や比叡山の学僧たちに尋ねれば良い」
⇒　痛烈なひと言

■ただ念仏して

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。

この親鸞においては、「ただ念仏して、阿弥陀仏に救われ往生させていただくのである」という法然聖人のお言葉をいただき、それを信じているだけで、他に何かがあるわけではありません。

親鸞聖人は、念仏のほかに往生極楽の道を知っていると思い込んでいる門弟たちに対して、厳しい言葉でその邪推を打ち破られ、自身は、法然聖人から聞かせていただいた本願の救い、専修念仏の教えを信じているだけであることを示された。

■たとえ法然聖人に騙されても

たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。そのゆゑは、自余の行もはげみて仏に成るべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

たとえ法然聖人にだまされて、念仏したために地獄へ堕ちたとしても、決して後悔はいたしません。なぜなら、他の行に励むことで仏になれたはずのわたしが、それをしないで念仏したために地獄へ堕ちたというのなら、だまされたという後悔もあるでしょうが、どのような行も満足に修めることのできないわたしには、どうしても地獄以外に住み家はないからです。

法然聖人への信頼と自己の分析
⇒　本来、地獄以外に行き場所のない私（地獄一定すみかぞかし）が救われていく道、それが阿弥陀仏の本願の教え。

■弥陀の本願まこと

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず候ふか。

阿弥陀仏の本願が真実であるなら、それを説き示してくださった釈尊の教えがいつわりであるはずはありません。釈尊の教えが真実であるなら、その本願念仏のこころをあらわされた善導大師の解釈にいつわりのあるはずがありません。善導大師の解釈が真実であるなら、それによって念仏往生の道を明らかにしてくださった法然上人のお言葉がどうして嘘いつわりでありましょうか。法然上人のお言葉が真実であるなら、この親鸞が申すこともまた無意味なことではないといえるのではないでしょうか。

①阿弥陀如来の本願が真実であるならば、それを説かれた釈尊の言葉は嘘ではない。
②釈尊の説かれた言葉が真実であるならば、その言葉を解釈された善導大師の言葉も嘘偽りではない。
③善導大師の解釈が真実であるならば、善導大師の教えに依られた法然聖人の言葉も嘘偽りであるはずがない。
④法然聖人の仰ったことが真実であるならば、この親鸞が申すこともまた無意味なことではないのでないか。

※「なぜ本願が真実なのか」を知りたい人に対して、「本願が真実であれば･･･」と、全く逆の論理展開。

⇒　本願念仏の真実性は、救いの当事者において開かれる世界

お念仏の教えは、阿弥陀如来の本願を源流として、釈尊 ⇒ 善導大師 ⇒ 法然聖人と次第してきた教えであるという、親鸞聖人の信心の原点が示されている。

※「親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず候ふか」
⇒　仮定の言葉で表現しているのは、領解を謙虚に述べているため。
「この親鸞が申すことは決して間違いではないのだ」と断言するような、高圧的で自己を権威づけるような傲慢な思いをもっていなかった。

親鸞聖人の自己認識

煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします。

（『歎異抄』後序）

■面々の御はからい

詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと［云々］。

つきつめていえば、愚かなわたしの信心はこの通りです。この上は、念仏して往生させていただくと信じようとも、念仏を捨てようとも、それぞれのお考えしだいです。このように聖人は仰せになりました。

親鸞聖人は如来の仰せにしたがうより他に、救われていく道はどこにも存在しない、という自らの信心を表明される。そして「面々の御はからひなり」と、門弟たち一人ひとりが如来の仰せにしたがうか、したがわないのかを聞き受ける以外に、救われていく道のないことをはっきりと示されて、第２条は閉じられていく。

※師弟という関係ではなく、ひとりの念仏者としての回答。

如来と自分との関係

『蓮如上人御一代記聞書』(171)

往生は一人のしのぎなり。一人一人仏法を信じて後生をたすかることなり。

往生は一人一人の身に成就することがらである。一人一人が仏法を信じてこのたび浄土に往生させていただくのである。

第２条のまとめ

◆親鸞聖人は「往生極楽の道」を命がけで尋ねてきた門弟に対して、「ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」と告げ、その他の道は何も知らないと述べられた。

◆親鸞聖人は、自身のすがたを「地獄は一定すみかぞかし」と受け止められ、法然聖人から聞かれた如来の仰せを信じ、したがうより他に、自身が救われていく道はないとの領解を述べられた。

◆お念仏の教えは「弥陀の本願」を源流として、釈尊・善導大師・法然聖人と伝承され、親鸞聖人に至り届けられたものに他ならない。その自身の信心の原点を示し、「念仏ひとつの救いを誓われた如来の仰せにしたがうか、したがわないかは、あなた方のお考え次第です」と、師弟の関係性を超えて、一人の念仏者としての立場から告げていかれた。